いはや　三

このやうに人も知る越前乃くに
あちこ乃郡中ところ〳〵に住座人
大あらへ乃皇子に候の御中老
まうはざるゝも我よわ候使して
武烈天皇の候代をあちまゐらせて
皇子なき御継位わあるまじ候道の
人〳〵まゐるべき事に候とも申けれ

とりわけ御上洛まではござなく候程

御發意あるめし候かりて被ては

御ひろまへとや御くさ程

御願ありて御里に御座なりけるの

御上洛に候よし御たまはり候さと

ひさしみ御手な被し候都へ

まいらせ被候なされよもみて

祭神との御事ままに候とより

だしも御流ねの御里へと急ば

ありがたう被しやう被へ御出候よ

ご被まそや中は庵しりふ中は

シテ 何事にて候

男 我君ハ敢よわ

御座くたはばく御位に御手物ひ

はやとる御上りまで候よ光来

御女と清む篭と成たしうふ
下りうせまゐらせ清うまうは
ご飛く清らかりん 極ハ飛君　ミテ詞
清位よ清りのを姿ひみやこへ乃
清上至遠くも清めて毎うきう
りへとよそわなりうぎ清月の　ヲカル
いーー、ーーーーーーーー、ー
清名残ど清の世よりハ忘るへき

ーーーー、ー、ー詞
ぢあり清名残おしやごさ飛く思召
忘りて清たまの清き名残し
をこのをたまのふきつとのお飛さるは
ぢ急きみ気りをんりもぢ飛無神天　上カル
ーーーーーーーーー
皇孫孫第を保ちたまひしぢ斎位を
ーーーー、ー、ーーーーーー
孫方によりとさせ代ぢ天照大神の
ーー、ーー下ーーーーー
神孫なり飛は毎ねすり伊勢を

珍しまわしき神遊乃いろわ
よや君がよのえらひより出そ於て
いさ那り於逢く雲於上めくわ
何ふつき月影を媒のたのしみ
のこりなからそめたく袖小袖
な於し月影乃きはしくも井小
へ多くあまとも咲
上三下
出里妙ふ

上三下
水なきの波よ残るうの那しけ
君と住経うふみし山里のく
びとるま残まてとゆ乃ほぎなが
我も待下住松のあらし～も
いたし～のふざらかあらくて
な流りしき伺花果さえ立意を
ばらきえ里小の庵まれわく

次第
君乃めぐみもつ富はじく
み恵の御幸乎め母かうけ
聞くも此君は應神天皇五代の
御末大あとべの皇子と申し
御年す御位おきまわて継体
天皇と申なり　さら秋大治まる
御代乃みうけば野もとの〆も

なのひふあふ大和國や玉穂
都よ　ふゝ遷　あくゑなわ
よ綾清よ詠めなゑもひさし
此天夢のぐらぬ玉さゞう遊く
嫌乃定露も志く種も時めきし
四方よ靡ふりたもみちば松も
千歳の郷まつどふぬ深あ勢に

下
廻り行つ清章乃東字めせく
(後シテ一セイ) いのちあまたなる様人をへ乃き
なしつゝんば物くるひとや
物狂もおりふし心のあまりたるちう
(上カル) とんなどと情なく哉猿まねそうや
(ツレ上カル) よしなふひとそなしつ候とも
我へ乃花しはへいうりんあまき

清滝んるまつ乃渡里は
(シテ詞) 何のかの乃かうとやかくる
よく思ひ出したわ様よいう待も
うるまうの敵へ渡るなのまよ清定
(ツレ) にそうきちとあし君り正愛我と
やせ〳〵もみつゝなま居 (シテ詞) 拝を
志くへの有よわれ友と (ツレ) に 我も

しな世のつまひしにきつ浦まて
越路乃しるへなれそれゆへ
知る都の旅寝の旅衣を
瀬きし南乃都路に手枕なきも
ともすれば浦まてゆきやとゆると
うきの旅衣どひたちりわらす
ずつ路りな　君を慕ひきし湊

白山まつをながめてやみまし
足引の山のやまとはいつく白雲の
ぞ高き松の嵐のひびきかや
やみな世及ひなき雲井の他他く
清影山月の本なまやみなれや
また別れようしきかな　峯
阿ふみ路のながれをやがて

上吾ノ

よしなくも及ばぬ恋よ浮舟の
漕がれ行く袖を思ふの川わ衣く
涙も色り見發乃おもひせるかなし
小路乃波よこ波敷すゞの袖きえ
麻の報川跡うしまでなほ道ひ行
嫁草がかげ青山青雲分けて思ひ深の
言よ異ふくわし時しも

法花も月やあきらかなる神の色
うけ貴が兼ねて法の道に
罪ふかを以ましめ両こよ法華経
行先を清めなわさなあへふ
我よなきぬひ那人の女とかひ
狂人と以ひきうけの思ひなくの
吹く風も見る露霜乃法華経

先よりこそ見えたれ　ゆきや隈
面白人よりかりつゝしたる狂女と
みえて見苦しや　とく官人たち
よりつゝひきわずらふおきさん
悲しや君の御花筐をすて落
されては　何といふ　何と君の
御花筐を打落されしとや悲

いかはし思ひつとやは　いかにいふ
狂女ども物にくるふことな君の
御ハ隈もさこえとそ渇仰ひする
ぞも君とはたう事を申す
ことあからしきとひきつとりな
ば君なくて日おもひしもとりしばこ
ちとききみのまし　きのはつきり

（ツレ上ウキ）かゝる哀を甘なる狂人なれば
ざうろし此おかしめきなるこの
かたじけなくも此君は延喜
天皇五代の御孫ばおはします
此国のおあちらまの此中山さとに
（シテ）あかあとへの皇子とやし
（ツレ）それ此国の始乃翁よ（シテ上ウキ）継孫乃
（ツレ）さきはうほどに
君と申すや
（シテ）清気のこころを
めぐるゝ浅君の
（シテ）打落し舞ふ
なる孫もなきそ
（シテ）飛くらも猶狂よ
（地上ウキ）人とさう
おかしやゞ世は末世なり
及ふ此世とは月を地に落は
まのあたりもきぬり衣のさみを

あさけなやあさうらめしの清ちるよ
おとしたりし天乃とかめも
しらまちよ罰あたりわるまひ家
ござらねあは狂気しかども懲
鬼狂といはり神きを好ふな人よ
いはり神さる好ふ那のやうみ
中せいゞく唯うつな美な道の
かるしくやあかひしばきみ
とらこそれ古稀の皇子の清力
なれこそ和毎乃清とめ小毛を
たまれ孫し高座や天照皇
大神宮天長地久と唱へきを好ひ
清く清き何ハさ奉りたまへし
清酒霧ハ男ふうひて忘るさへ

上

まつとも待たかりしやこゝろし在

陸奥のあさかの沼乃花かつみ

かつ見し人を恋猶の恋ふもあり

しらぬ旅寝する寛まで心乃君乃たゞめ

衆にきえうら浦あら月影も

みのえしを袖よもうき浮て狭す

みえまもとゝきいば浮よ水の

月を影うつ芸猿のしゝまえば

以て泣虎かく　いとゞ狂女

宣尊まゝそる「はゞ車をうつ家かゝる

ばゝまも面白く傍ふて篠遊び

らく数読きつきと人清すかく

あるる蕉ひて狂らん　嬉しや

梅ハ及なさ清のは在木の間人や

ゆへ義ばさや狂ひ気も破れたるよ
ずん遊にめふゝはふりやしきう
みなき義なりし毎ゞもとな物
かうけなるたとへなきこ
ばりなれば漢王は李夫人の情
お物を歎きひあまりはかなく
神さひてずみ給ふとも涙よ

げに思ひの涙は衣乃袂をぬらす
しかも李夫人はかりそめの病
重りて露乃床のうへ
ずつから鏡のかげをうつして涙よ
情門みえ給ひしてあらぬ
みかどふかく歎きのあまり
其御かたちを甘泉殿乃かべに

繪ー寫も畫圖にたちそひて
丹青なくよ好ひくわざ飛とも
中々に思ひのまさり物いひ
かたらひ事なきを深く歎かせ給へ
是ぞうと中太子のいとけなく
ましましゝの武帝にそうし給ふ
李夫人兄李は甘泉の

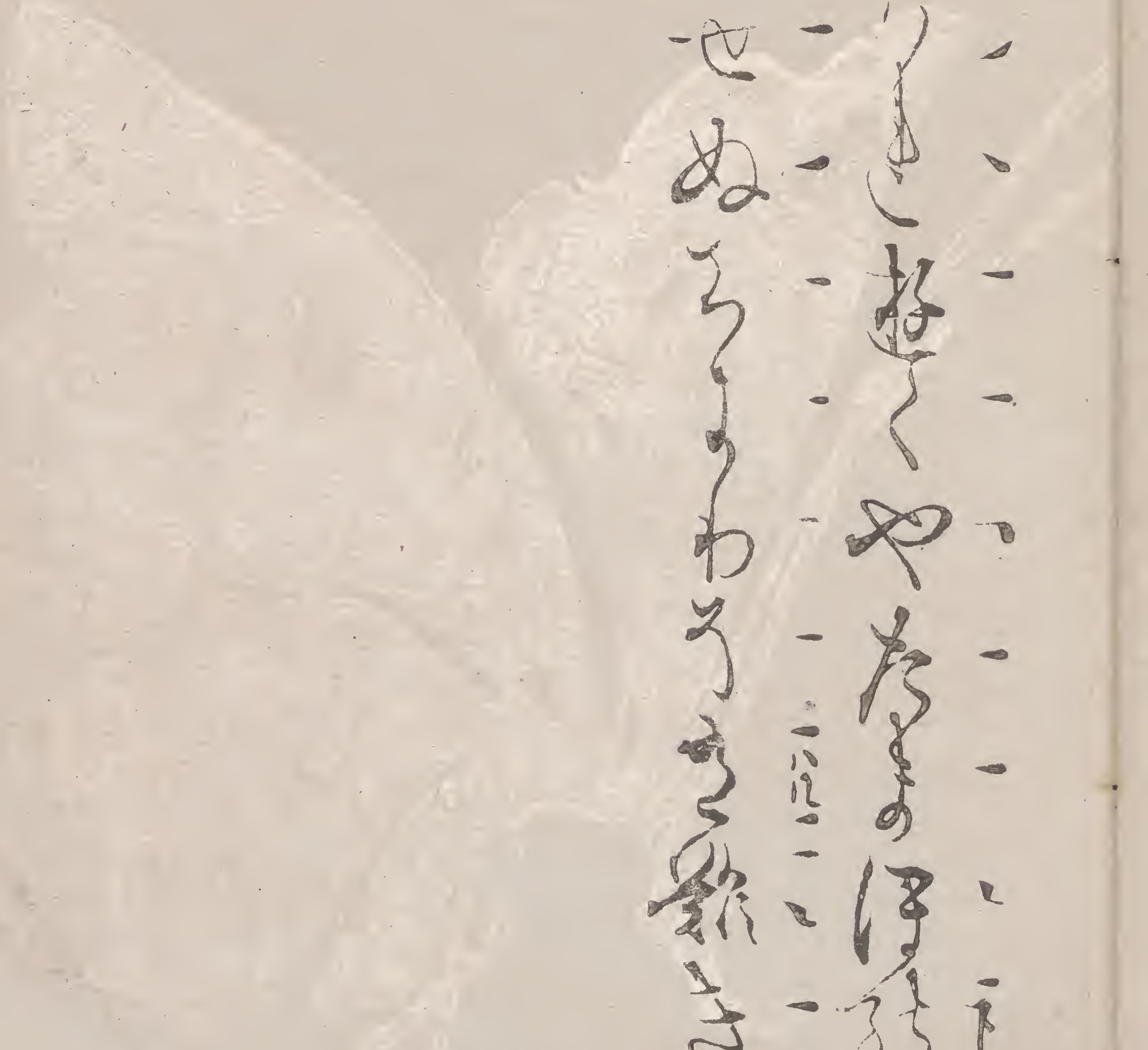
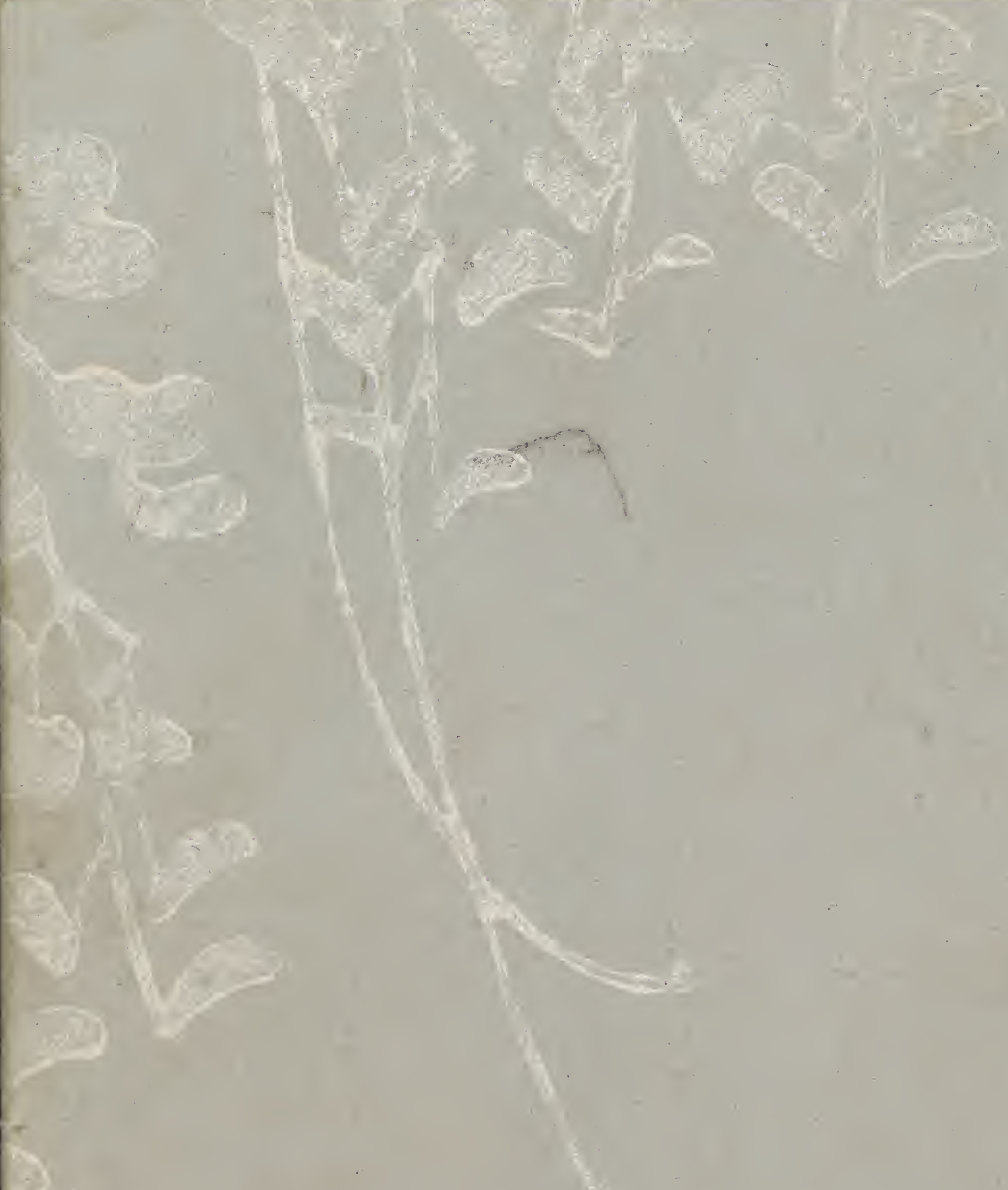
蓬萊だるはいこくに仙女あり
一旦人間に生るゝとは申せど
つゐにもと乃仙宮に帰りぬ
泰山府君に申うけて李夫人の
面影を暫爰にまねく廻しとて
九花帳のうちにして反魂香を
焚たまふ夜ふかく人志づまり

すゞしき陰しく月もなかばよ
うつりとおもひし西影のおもふり
な夢り小町画尽猶〆や下し流
思ひ草葉すゑに結ぶ白露の
手にもたまらで程も無く
流れしきてぬまは憐愍楊と
しをみざれぬ夢さなし

上
かなしきかなや小李夫人の
住給ひし甘泉殿をたちさりし
ぜなしき床をまもりしひさき
みゆる古き枕獨被をのこしく
詞
宮さそあはさ花芽さへ哉
乃ハしけ世をあさ人へ
やまとのわ流
すまゐきかをのきちるん空なる

我篭を賜りしなうかりける
早上ヵル はつは君を歎きて極もなよ
田舎より清をまなかみしは花筐
詞
だ月しき留置給ひしは玉章乃
上ヵル
恨みも忘れ狂気をしづめもとの
ちとせ召つりかへと誘ひ道るわ
ヒテ上ヵル 実に難有や御恵しく万歳は代々

の廻る袖も思ひ大路もろし
早 狩見給ふとき後花小時より色
ヒテ 花乃篭の花殊とめて 早 恋しさ
人の手をな神し鬼を ヒテ のこ見せ
早 名付うめしこと此附よりう
ヒテ 上ヵル はしまるを都 きな絲や角りわ
情乃末をきて露の恵にも秋ぬ

花筐の御うちとましすみくぬ
君おはし心をも難き　流遊も浪
問ひ義てつくりかへ筆の月
なう母と様まの人と流く夜ま
履呂はくくるもかもち楽ちわとふ
みさ衆をりしひずらふや被も
山風よざうりまどりや玉ほ称

さうりまき遊くや旅まほ称る
ほまよせぬさうわうき称き